

昭和レトロ館

家の窓に網戸はなく、
クーラーもなかったあの頃に
日本の夏の風物詩といわれた「蚊帳」^{かや}。
中に入るとなぜか心が安らぎ
安眠へといざなわれた……。
今回は、蚊帳の歴史と文化に詳しい
三島治さんにお話を伺った。



三島 治さん
昭和31年生まれ。蚊帳・布団店の菊屋（静岡県磐田市）を営んでいた父の跡を継ぎ、昭和55年に社長就任。平成9年には自社ブランドの蚊帳を開発、マラリアなどに苦しむアフリカ諸国に寄贈して話題に。自他ともに認める蚊帳博士。



写真提供 / 菊屋

蒸し暑い夜は窓を開けて眠りたい、でも蚊が心配……。そんなときに蚊帳は欠かせない存在だった。

蚊帳^{かや}

秘密基地にしているような
ワクワク感があった！

網戸やクーラーがなかった時代に、蚊帳は、蚊の襲来から人々の眠りを守る「寝具」として愛用されてきました。使ったことがある人は「存じだ」と思いますが、夏の寝苦しい夜、

家族の人数分の布団を敷いた部屋の隅につるして蚊帳を張ります。これだけでも非日常的な風景で、子どもだった私は、「家の中に秘密基地ができた」とワクワクしたものです。そして、いよいよ就寝というときは、蚊を侵入させないように裾を持ち上げて素早く中に入るわけですが、これまたスリル満点。大きく開けると親から「蚊が入るよ」と怒られて……。蚊帳の中では、「不思議と」誰かに守られているような「安堵感」に包まれて、すぐに眠るのが惜しいと思っただことを覚えていてます。

安価な製品の登場で 各家庭の必需品に

もともと蚊帳は日本発祥ではなく、紀元前6世紀の中東で生まれたといわれています。日本で蚊帳が作られ始めたのは奈良時代になつてから。実際、布団よりも蚊帳の歴史の方が長いといわれています。

るんですよ。江戸時代にはお公家さんなどの上流階級や、一部のお金持ちに愛用されてきました。当時の素材は麻で高級品だったんですね。明治に入ると次第に庶民も蚊帳を使うようになります。そして戦後になると、価格も手頃になり、各家庭の必需品に。色は地域によって多少異なるようですが、私の地元静岡ではグリーンが定番でした。

昭和の良き時代の 象徴だった

ピークは、約300万張を生産した昭和40年です。これ以降、道路のアスファルト化が進んで水たまりが減り、蚊の発生が以前ほどではなくなりました。さらに密閉されたマンションタイプの家屋が増え、強力な殺虫剤や蚊取り線香も登場して、日本人の暮らしが一変します。これらの変化に合わせるように蚊帳は、日本の家庭から姿を消していきます。同時にベツ



蚊帳にはさまざまな形や色がある。

ドを使う人が増えて、親子の個室化も進みました。その意味で蚊帳は昭和の良き時代の象徴と言っても過言ではないと思います。近年、蚊を殺さずに平和的に身を守る蚊帳は欧米を中心に見直されて、「癒やし」のヒーリングネットと呼ばれることもあるんですよ。中でヨガをやったり、瞑想したり……。蚊帳を知らない若い人にもぜひ体験して、その良さを理解してもらえたらいいですね。